

# 科学論の試み——現代の科学技術と社会を考えるために

須藤 自由児

はじめに

「科学至上主義」とよばれる立場がある。現代フランスの科学史家、P・チュイリエはその立場を次のように整理している。(1)科学が唯一の真正正銘の知である(2)「合理的」な問いなら一切の問いに答える。(3)すべての人間の営みを科学の権威の指導にゆだねるべきである。以上のように考え、あるいは主張する立場であると。そして次のように具体例を与えている。一九一三年のノーベル賞受賞者、パリ大学生理学教授シャルル・リシエは、第一次大戦後に出版した『人間の淘汰』の中で、科学だけが人類の悲惨を減ずることができるとし、遺伝生物学による「人間の種の進歩」を唱えた。リシエは人類の悲惨は白人よりも劣った黒人や黄色人種 $\parallel$ 人間のくずが平等を要求しているところにあると主張した。<sup>(1)</sup>

リシエにとって第一次大戦は何だったのだろうか。彼は極端な例であろう。白人のほんの一部の人種差別主義者を除いてこのような主張を認めるものはいないであろう。

大著『社会生物学』(一九七五年)で知られる現代アメリカの昆虫学者、ウィルソンはこれほど露骨で、直接的な主張をしてはいないがやはり科学至上主義者の一人とみられる。私は、多くの人が、階級的、人種的、あるいは性的な差別、あるいはまた戦争などは、私達が単に生物でなく、人間であるが故に克服すべき社会的・文化的現象であると考えると思う。しかし、ウィルソンは社会的・文化的現象は、生物学的根拠をもつ、つまりダーウィンのいう自然選択による適応 $\parallel$ 進化の結果だとする。これは学説なのである。さらに彼は、倫理学を生物学、遺伝学によって根拠づけるべきだと主張し(これは後にひっこめたといわれるが)、しかも一般市民むけの講演では、人種・性の差別が存在する現状を肯定する発言を行っているとい<sup>(2)</sup>う。

これらの例のように、人種や性の差別を肯定し、戦争を生物学から根拠づけたりすれば、多くの人が「科学至上主義者」の発言に首をかしげたり、反発したりするであろう。だがチユイリエが科学至上主義の思想としてあげた三項目自体をながめてみる時、むしろこれは一般市民の常識ではなからうか。「天災は神の怒りなどによってでなく、科学的に説明されるべきである。科学、つまり西欧近代科学はガリレオ、ニュートン以来絶えず進歩してきた。現在、解っていない様々な現象も将来必ず科学によって説明されるだろう。」科学の権威という点については、たとえば、「これまで公害問題などで、時々、関係分野の専門家、学界の権威といわれた人が加害企業の責任逃れに加担し、インチキな原因をでっち上げて原因究明をおくらせ被害を大きくしたというようなことがあったにしても、結局は真実は科学的な研究によって明らかにされたのである。」こんな風に考えるのが常識でなからうか。<sup>(3)</sup>

だが、次のことは指摘される必要がある。一九世紀末の「科学の産業化」以降、とくに第二次大戦以降現代では、科学は高度で複雑な技術や装置を媒介にして営まれており、逆に技術は高度化して、科学理論を抜きにはなりたたない。科学と技術は一体のものとして、科学技術として、はあくする必要がある。<sup>(4)</sup>

そして、このテクノロジ―としての科学によって生みだ

された核兵器が人類を地球上の全生物ともども全滅させてしまふ可能性をもたらしたという重大な問題は言うまでもない。原子力発電や、ジャンボジェット等高度なテクノロジ―の産物が、一方で便利で安楽な生活を拡大しているようだが、他方で、何百人もの人々の命を一瞬にしてうばったり、あるいは、世界中の何十万人もの人々にガンの発病によって長期的に死をもたらす大事故をひき起こしている。超伝導技術や遺伝子工学が夢のような(?) 便利さや数々の利益を生みだすと宣伝されつつ研究が進められているが、それらがまた、これまでと違った種類の大規模で深刻な公害や災害をひきおこしたり、あるいは人間や生命の尊厳についての考え方を根底からくつがえし、人間社会の崩壊につながるかもしれないという可能性が指摘され、科学・技術の進歩を手ばなしで期待することはできなくなっているのである。臓器移植の可否について政府が各界の「専門家」からなる委員会をつくり「国民の合意」形成をおしすすめるようにしているのはそうした現象の一端である。

一般市民の間でも、個々の研究者、科学者がそれぞれ勝手に「真理探究」活動を行っていくことが「人類の幸福」につながるというような素朴な考え方は少なくなりつつあると思われる。しかし、医学をふくめ、自然科学研究の進め方は、社会学者や経済学者など専門家の「客観的に真」であるといわれる「科学的」知識を寄せ集めれば正しく決

められるであらうか。社会学や経済学においては、物理学をモデルに、仮説―検証法が採用され、数量化、厳密科学化が相応な勢いで進みつつある。このことからだけでも専門家の委員会に科学技術のあり方をまかせるといふ考えは、上の(1)と(3)に見る科学至上主義の考え方そのものである。

ウィルソンやリシェのように、自分の(いわば非科学的な)イデオロギーや人種的偏見を「科学的研究」による理論あるいは学説であるとして主張するやり方と(1)と(3)の考え方とは区別すべきだという見方もある。例えば後に論ずるドイツの科学哲学者、エリザベート・シュトゥレーカーは、科学が人類の全滅の可能性をもたらしたという問題にふれながら、それは、自分が生みだす結果に対する科学(者)の「無関心さ」から生じるのだという。彼女の考えでは、科学は本来、あるいは科学者の多くは、社会に対して働きかけたり影響を与えたりすることをめざしてはいない。しかし、科学の「無関心さ」については注意する必要がある、科学的認識の技術的行為への転換プロセスを決定するものが何かをくわしく研究する必要があると言う。

一九六〇年代以降有力になっている「新科学哲学」は上の(1)と(3)が決して正当化され得ないことを明らかにした。だが、少くとも(1)のような考え方に近い立場からそうした新科学哲学への反論も行われ、論争が続いている。以下では二〇世紀における科学哲学の議論をごく大雑把に概観す

ことで、私達が日常生活の中で単に企業や国家によって与えられる科学技術の成果を受身に享受し、同時にそれらのもたらす災いをも黙って甘受するというのでなく、科学技術とそれに支えられた社会のあり方を一人一人が主体的に考えていくためのヒントを得るのに役立つべきだ。(ただし文章化にとりかかるのがおくれ構想が十分でないまま書き出し、内容が不十分な点はお許し願いたい。)

最初に現代科学論の歴史を大きく三つの段階に分けて、それぞれの段階での社会的・歴史的状況と科学論の連関をとらえる試みをする。哲学説を把握・検討する時には、ここでの論証(前提や推論や証拠)の正當さあるいは正確さだけが問題にされることが多いが、後にふれるホーリズムという見方に立つとそうしたやり方は正しくないのである。ホーリズムでは、何らかの言明の真偽は用いられている言語の意味連関のみによっても、また、個々の経験との照合のみによってもきまらず、言明の連関が全体として経験と照合される必要があると考える。現在のケースでいえば、一つの科学哲学説の真偽、正当性はそこに登場する諸言明をこれまでの哲学や科学全体の文脈という「言語の意味連関」に照らしてだけ決定することはできない。また経験や事実との対応という点について言うならば、当の科学哲学説の言明、たとえば「科学理論は実験データによって検

証される」という言明はそれを個別的にとりだして、「実際の科学」や科学史的に明らかにされた「科学の事実」と照合してみることによって、真偽は判定し得ないのであり当の哲学者あるいは学派の様々な諸言明全体と一体のものとして、それに対応ないし「接触」する経験の全体によって判定されなければならないのである。(実際には科学哲学の議論の文脈のみで取り扱っているケースもあるが、それは私の不勉強からやむを得ずそうしたまでのことである。)

**第一段階の科学論** 一九三〇年代のヨーロッパでは、ハイデガーなど著名な哲学者をもふくめ、諸学問がナチズムやファシズムの神話に屈服した。カルナップを中心とするウィーン学派あるいは論理実証主義者とよばれる一群の人々は科学の妥当性を客観的真理であることに求め、この客観的真理の規準を基礎づけようとした。論理実証主義は「ファシズム的反動に明確に対立しながら」進められた運動であつた<sup>(8)</sup>。

ここで、同じ時期に研究が進められていたマートンの科学社会学をべつとしておく。以下の本論ではふれられない。マートンによれば、科学者は「普遍主義、公有性、利害の超越、系統的な懐疑主義」をエートス、基本姿勢としてもち、おり「経験的証明は適切妥当で信頼できるものでなければならぬ」、「知識は論理的に首尾一貫していなければ

ならない」等の方法論的規範にもとづいて研究を行つており、これが科学的知識の客観性を保証し、累積的な発展を可能ならしめてきた。だがこうした姿勢や規範が実現されるのは民主制の下においてであつて、全体主義の下ではうまく機能せず、科学の発展はゆがめられる。マートンはこのように主張した<sup>(9)</sup>。このみかたは論理実証主義哲学と根本で一致している。

**第二段階** 一九六〇年代半ば〜一九七〇年代、新科学哲学の登場。クーンは科学史における多くの「革命的な」理論転換の事例を研究し、「革命」前後で異なる科学理論は各々全く別な事柄を論じているのであり、客観的な真偽や優劣は問い得ない、従つて革命を通じての進歩は存在しないと説いた。この時期は核兵器を生みだすに至つた「科学の進歩」に対し強い懐疑が広がつた時代である<sup>(8)</sup>。また、第二次大戦では、資本主義国であつたドイツや日本の侵略戦争に抗して闘い抜いたソ連や中国の「共産主義」あるいは「社会主義」体制が資本主義に比べて経済的にも道徳的にも優つていると広く考えられた。そして歴史は革命によつて単線的に進歩するという考え方が一部にあつた。クーンはこのような歴史観には批判的であつたとも言われている<sup>(9)</sup>。

**第三段階** 一九八〇年代以降、現在まで、上の二つの立場のどちらかに近い立場に立つて、理論の修正や深化を生みながら論争が続いている。内容は後にふれる。現段階が

いかなる時代であるかについてもそこでふれる。

一

論理実証主義の科学哲学は、前期ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の思想に依拠している。それによれば世界は独立した、因果連関のない無数の要素的事態の集まりであり、それら要素的事態に対応する思考における像であるところの要素命題の集まりが言語である。例えば世界とは「ここに赤いボールペンがある。」「そこには果物が(存在して)ない。」という事態の集まりであり、言語はそれら事態に対応する思考の像あるいは絵であつて、像あるいは絵が正しく描かれたものかどうかが問われるのと同じように、言語、実際には文または命題 Satz の真偽が事態と比較することによって語られる。

さてすべての命題は要素命題の複合体であるが、要素命題の真偽にもとづいて命題の真偽が語り得るものと語り得ないものと二つに分けられる。たとえば  $P \vee R \vee T$  (気体の法則) は真かどうかをたしかめられる。あるいは「Aであると同時に否Aである」ということはない(矛盾律)はAにどのような、要素命題を入れても必ず真となる。それに対して「物事の生起には必ず原因がある」という命題や、その他、哲学の多くの命題、倫理学等は、真かどうかはわ

からない。真偽のきまる命題を真理関数的命題とよび、これを「有意義な命題 der sinnvolle Satz」というが、これはさらに、経験的命題(経験的にその真偽をたしかめうる文)と論理的命題(常に真または常に偽)とに分け、真理関数とならない表現を「非意義的 unsinnig」な命題あるいは「疑似命題 Scheinsatz」といふ(10)。

否定の連言・Nを用いた命題の一般的表示法や、実践論、幸福論など興味深い議論は多いが一切割愛する。後期ヴィトゲンシュタインは『哲学探究』で、この『論考』とは全く異なる哲学的立場に立ち、新科学哲学はその影響下にあるといわれるが、ここではその点は論じられない。

カルナップを中心とする論理実証主義においては上のような思想を踏まえて、(1)倫理学などを「検証できない」「真偽を問えない」として哲学から排除し、(2)真で有意義な文を、語の定義または意味にもとづいて真(「分析的に真」)の文と、経験的に真偽が検証される「総合的に真」の文とにわけ、さらに(3)(科学の)検証は、語または文に対応する要素的事態の存否の観察によってなされる、と主張した。そして、科学の言明がそこへ還元されるはずの要素文や用語を定式化することを試みた。また検証||真偽の確認とは言つても、「すべてのXはAである」という普遍的言明の形の法則の真偽は直接には確かめ得ないが、ではそこに含意される多くの事例について肯定||「確証」されたとして、

それは法則（すなわち仮説）の確かさをどの程度保証するといえるのか等の研究に力を注いだ。<sup>(13)</sup>

一九六〇年代にヘンペルは基本的にはこのような立場に立って、ポパーらの批判も考慮しつつ、「科学的説明を定式化した。ここでは次の点を指摘しておきたい。彼は説明が科学的であるために満たすべき基本的要請の一つとして、説明項 explanans と被説明項 explanandum との関係が論理的演繹の関係であることをあげている。（他の一つはテストできること。）しかし、これは村上により繰り返えし指摘されているとおり、神話による説明などと区別するメルクマールには何らならないのである。<sup>(14)</sup>

しかし、科学と非科学が区別できない点の強調は科学至上主義的な考えを克服する上で重要だが、議論はそこにとどまるべきでない。科学の特徴はある。ヘンペルは「人間の科学的努力への刺激の要因」として、第一に「実用的」で、「予見と制御」を可能にすることをあげている。<sup>(15)</sup>第二に知的好奇心をみたすこと。彼は目的論は「予測を与えない」ことを理由に科学的説明から排除し、生物学の領域でも機械論で研究をおしすすめるべきだと説く。だから、結果や予測の法則からの論理的演繹という、形式的、認識論的説明で実際に語られているのは、制御のための確実な予測を可能とするような関係ということであり、ここに科学の特徴が明確に示されているといえる。<sup>(14)</sup>

### 論理実証主義に対する二つの批判

(a) ポパーは命題の真偽が客観的な実在との対応によりきまると考える科学についての根本のみかたでは論理実証主義者と一致する。しかし、彼によると、普遍法則は検証できず、また、証拠による確証度は確率論的に結局ゼロとなるのである。彼は科学は自分が真であることを証明するために証拠を探しもとめる保守的な活動ではなくたえず批判し新たな理論により自分を乗り越えようとする前進的活動であるべきだと科学の知的探究という側面のみを強調した。そして合理的と批判的とは同じことだという。こうして、反証可能性、つまり、その法則言明に反する事例が見出される可能性をもっていることが、経験科学の「境界」基準となる。ヘーゲルやマルクスが述べた歴史法則は反証しえず、科学的とはいえない。

ポアンカレなどは、科学の理論はテストの結果がそれに反する場合に補助仮説を適当に採用することによって維持し続けることができるという、規約主義を主張した。<sup>(15)</sup>ポパーはこれが原理的に反駁できないことを認める。しかし、彼は「決意」によって規約主義には従わない。規約主義は知識を前進させないからだという。<sup>(16)</sup>

ポパーの考え方を継承して、クーンやファイヤーアーベントに反対したラカトシュも科学と擬似科学の区別を強調した。だが彼は、科学理論が反証事例に出会っても容易に

放棄されない事実をふまえ、予言によって新しい事実の発見をもたらす「前進的プログラム」をもっているかどうかを科学かどうかの区別の基準とする。彼によれば、事件の原因を事後的に説明する歴史学の通常の方法は「退歩的」であり、科学的ではない。<sup>(17)</sup>

ハンガリー生まれのラカトシュの科学論は第二次大戦後のスターリン主義の下での彼の体験と深い関わりをもっている。そして彼が権力による表現の自由の抑圧に反対することは理解できるが、表現の自由を科学にだけは確保しなければならずそれとの関連において科学とそうでないものとの間の境界設定を行う必要があるかのように述べていることには全く賛成できない。<sup>(18)</sup>

(b)クワインは一九五〇年代のはじめに認識論の全体主義 Holism とよばれる観点から、論理実証主義の科学哲学を鋭く批判した。彼によると、どのような言明もその真偽は言語的要素と事実的要素の両方に依存しているのであって事実的要素を全く含まず語の意味または定義だけでその真偽がきまるような分析的言明と、それ以外の総合的あるいは経験的言明とに分けること（「経験主義の第一のドグマ」とよばれる）もできないし、また、個々の言明の真偽に関して二つの要素を分解することもできない。次に語の意味は他の語との全体連関の中できままっているのだから、ある言明をこの連関から切りはなして取り出し、個別的に、

感覚的経験とつきあわせることによって真偽を判断するということ（「第二のドグマ」）もできない。「外的世界に関する言明の真偽は、個別的にでなく、一つの集合体としてのみ感覚的経験の裁きに直面する」のである。

こうして「科学的知識は主観的なものでなく、意識から独立に客観的に存在している事実とつきあわせることによって真であることが確かめられる」という観かたは否定される。科学的知識も神話もともに「文化的な措定物 cultural post」であり、経験にまともな与え予測するための装置、道具であって、その有効性に程度の違いがあるというにすぎないのである。

この装置は、歴史や物理学や論理学その他の信念等々が結びついた、網状組織、ネットワークであり、「周辺において経験と接触する」。経験と衝突する時にはこのネットワークを構成する諸言明は様々な程度に「調整」あるいは「修正」が行われる。以下の行論との関係では、中心部に近い言明（論理法則等）は修正されることが少いが、しかし修正されると言われている点に注意しておく。つまり、時と所を問わず妥当すると思われるかもしれない論理学の諸命題も、経験と間接的に結びついているのであり、絶対的なものではないということが示されているのである。<sup>(19)</sup>

真であるとはどういうことかについて彼の考えをもう少し見てみる。彼は世界の全体を完全にとらえた、真である

文の集合体を仮想し、実際のある言明がこの仮想体に属する文と一致したら真といえるというような見方を否定する。というのはある言明はそれが属するネットワークから独立には真偽を語れないからである。従って、「真」といえるのは、ある理論またはネットワーク「の指定する実在によって満たされている」、理論またはネットワークの「内側からみられた文である」ことになる。こうしてクワインの考え方に従えば、相対に異なるネットワーク——例えば、アリステレスの時代の人々のそれは現代人のそれとは相当ちがっていると思像されるが——に属する文の真偽を、別なネットワークから直接に判定することは意味のないことであると結論される。<sup>(20)</sup>

## 二

クインの『科学革命の構造』は科学論、とくに科学の理論の真理性に関する議論にきわめて大きな影響を及ぼした。ウィーン学派やポパーなどによると、科学理論は客観的事実によってテストされつつ、絶えず進歩し、真理にますます接近していくと考えられた。だが、クインによると科学史上の多くの事実からはそれと全く反対の科学像が浮び上ってくる。

ある時期、ある領域の科学の研究は「パラダイム」に従

った「通常科学」の「パズル解き」だとされる。パラダイムとはニュートン力学や相対性理論のような、一般理論を含み、自然現象を分析し定式化する方法であり、自然をはめこむ「鋳型」である。アリストテレスの『自然学』、プラマイオスの『アルマゲスト』、ニュートンの『プリンキピア』や『光学』などのようにある時代の科学者集団に対して教科書のような役割を果すもので、科学活動を全体的に規定する地平のようなものである。たとえば、ニュートンの運動法則と重力の法則を適用すれば、天体の運動のしかたは必ず正確に予測できるはずであり、とにかく答はあるという確信を与える。こうして、一般理論の枠にもとづく新たな事実の発見、観測精度の向上、理論の整備など、一定分野の問題で研究が集中的に行われ、答えが出、業績も上がる。これが「通常科学」の時期であり、一つのパラダイムを前提して、つまり何が解かれるべき問題かがきまっているかぎり、科学は「進歩」する。<sup>(21)</sup>

だが、どのようなパラダイムにも難点があり、自然と完全に一致することはできない。うまく解けない、変則的事例が次々に見出される時期がやってきて、社会的、歴史的要因も重なり、変則的事態に焦点をあてた研究、「異常科学」へと移行する。そして、その分野に関する考え方、解決方法、目標をすっかりかえた、新しいパラダイムが登場する。これが「科学革命」で、古いパラダイムはそれと両

立しない別の新しいパラダイムにとってかわられるのである。

クーンによれば、科学革命は革命であるという点で政治革命と類似している。政治革命においては異なる政治体制の選択が問題になるが、二つの対立しあう体制の優劣を判定する制度的仕組みは存在しない。これと同様に科学革命においても、二つのパラダイムを比較し優劣を判定できる共通尺度は存在しない。解ける問題の数で比べるというように単純にはいかない。問題のリストが一致せず、科学についての基準や定義も異なる。例えばニュートンとアインシュタインの理論を比べて、後者は高速の運動物体についても適用しうるという意味でより拡張された理論であり、優れているとみなす考え方ががある。しかしこれは誤解なのだ。というのは、二つの理論では、時間、空間、質量など「宇宙を構成する要素」の概念が異っている。両者は別の事柄についての理論なのだ。異なる二つのパラダイムは「通約不可能 incommensurable」なのである。

入れ換わった二つのパラダイムは通約不可能で優劣は論じられないのだから、当然、革命の過程が進歩だとは言えないわけである。だが進歩したかのように見えるのはなぜか。新しいパラダイムを採用した科学者集団が、教科書などで、過去を歪曲し、同じ共通の枠組みの中の不十分でまがった研究のやり方として描くことによるのである。

クーンは科学の知識がすばらしい「道具」であるということは認め、この道具の「整備・洗練」という意味で進化を語ることは可能だという。だが、これまでの科学の歩みは決して「客観的な真理への接近」とは言えないのである。クーンが明らかにした知識の相対性、通約不可能性をフアイヤーアーベントはさらに拡張し単に科学的知識にとどまらず、歴史上の様々な文化は互いに通約不可能であり、歴史の進歩という考えがなりたたないと主張した。古代ギリシアのアルカイックな文化は、現代に劣らず合理的である。彼は「制度化された」科学の推進と現在の型にはまった画一的な科学教育のおしつけは、個々の人間の幸福と自由で多様な知的発展を妨げるものだ<sup>(23)</sup>と強く批判している。

### 三

一九七〇年に論集『批判と知識の成長』が刊行され、ここで、新、旧二つの科学哲学の論争が行われた。科学は、合理的で客観的な知識であり、その歴史は「連続的進歩」である(論理実証主義、ポパー、ラカトシュ)のか、それとも科学の知は、特定の共同体、集団によって採用されたもののみかたであり、他の領域、別の時代の知に優先する特別の合理性、特権性をもつものではなく、長期にわたる

歴史を通しての科学の進歩なるものは存在しない（クーン、ファイヤーアーベント）のか。これが二つの科学哲学の対立点である。

以下でクーン派への反論をいくつかりあげ、さらにそれに対してどのような反論、議論があるかを紹介し、また、私見を若干述べる。クーンが批判を受けている論点を（a）**通約不可能性**という考え、（b）**確証あるいは反証説を否定する際の観測の「理論負荷性」**の考え（c）**科学哲学を科学以外のもの、政治、etc.と関連づける議論のやり方の三つに分けてみる。**

（a）すでに前掲の論集の中でトゥールミンは次のように述べていた。科学思想の発展が重要な概念的連続性を伴い、入れかわった二つの理論が全く対立する原理にもとづいていることがあるということは認める。しかし、全面的に「通約不可能」というのはレトリックであって文字通りに受け取ってはならない。政治革命においても、クーンが科学革命とよぶいくつかの時期においても、よく検討してみると絶対的で徹底的な連続性の破壊は生じていない。このように言う<sup>(24)</sup>。これはもっともな主張である。しかし、このような議論だけでは、クーンの主張に込められている科学的合理主義、西欧近代に対する再検討の必要性という重要な問題提起を見落してしまうことになると思われる。

一九七〇年代後半、**エジンバラ学派**とよばれる人々がパ

ラダイムの通約不可能性と相対性（及び観察の理論負荷性）を強く主張して登場した。相対主義は自己矛盾におち入るというプラント以来の指摘<sup>(25)</sup>に対して、結局その批判は「合理性」、「真理」がとにかく「文化に依存せず、文化を越えてなりたつ」という勝手な信念にもとづくものでしかないことを明確に論証している。その上で、ポパー流の合理主義者は信念に対する十分な理由と信ずるに至った原因とに分け、後者のみが知識社会学の対象となるのであり、十分な理由にもとづく知、たとえば科学はその対象とならない（哲学的議論の対象とはなっても）と主張するが、信念が真であることの「証拠となる理由」がまさにそうしたものとして通用する原因が明らかにされるべきなのである。たとえば、合理主義者によつて、合理的な人間なら従わざるを得ないと感じるといわれる普遍的な推論形式、たとえば「PならQであり、Pであるとする。必然的にQが帰結する。」は合理的議論によつては正当化できないのに対し、このような推論が強制力をもつのは限定された目的や習慣、あるいは制度化された使用によるということが社会的に明らかにされるのである<sup>(26)</sup>。

**デイヴィッドソン**はクーンの「通約不可能性」の考え方は、一方に何か混同とした实在、世界が存在し、他方にこれを組織だて、整理してとらえる概念の枠組が存在するとい

う二元論に立って、この概念の枠組が時代と場所で異なる共同体毎に全く異なることを主張するものだとし、この二元論は放棄されるべき経験主義の第三のドグマであると批判した。そして、実在と概念枠との二元論が放棄されれば異なる様々の概念枠を、実在を尺度として共通の一般座標の中に位置づけることもできず、従ってそれらが互いに「通約不可能」とは言えなくなると主張するのである。デイヴィドソンによれば、そうした二元論は知識あるいは言明の真理性の説明において必ず懐疑論にゆきつく。彼によれば「草が緑である」ということの真偽を確かめる方法を抽象的形而上学的に問うのはまちがいであり、具体的な発話の真偽の問題として、当の言語における「草が緑である」という文の意味とその発話の真偽を確かめようとしている人達によって共有されている世界の状態とが確かめられれば十分なのであって、その人達の「信念や言語の外に出てゆく」ということは不可能であり、不必要なのである。<sup>(27)</sup>

野家は、クーンのパラダイムは経験的なもので、デイヴィドソンの「二元論という批判は的はずれ」という反論を行っているが、クーンのパラダイムをせまく解釈する必要があるとは思えない。「われわれ」の基準のみで他の理論を判断することはできないという「通約不可能性」の意味をはっきりさせれば十分だと思われる。<sup>(28)</sup>

(b) クーンはハンソンの「観測の理論負荷性」の考え

方をふまえて、確証や反証がなりたないことを明らかにした。ハンソンがゲシュタルト心理学などの研究成果をもとに示していたのは、Xを見るということ(観測や観察)は、XをAとして見る、あるいはXがAであることを見る、ということであり、その際、見る人が予めもっている先入観や「理論」(クーンではパラダイム)がその見え方を決定するということであった。<sup>(29)</sup> こうして、同じ観測事実が異なるパラダイム理論をもつそれぞれの研究者にとっては別の事実としてあらわれるのだから観測や実験によっては理論の正否を決定し得ないのである。「観測の理論負荷性」は、現存の科学理論が唯一正しいもので、客観的妥当性があるということを主張するためには都合の悪い事柄なのである。

観測や実験データが理論とは無関係に、客観的に得られたと見なしうる事例を指摘するというような反論も見られるが、ここでは、フランクフルト学派・ハーバースの「技術的関心が認識を指導する」というテーゼを批判しつつ、シュトゥレーカーが知覚の客観性について述べている議論にふれることにする。

フランクフルト学派は当初から科学の客観性という見方を批判していた。ウィーン学派の活動した時期と同じ頃、M・ホルクハイマーは、学者達の理論活動が自由で創造的だという幻想をブルジョワ社会の分業体制等々の構造との

関連で説明しつつ、「新しく発見された事実的関連が、現存する認識の編成がえにどれだけのものをいうか」は、いわゆる客観的真理性、あるいは方法論的要素によってでなく、「現実の社会的諸過程との関連においてのみ理解されるべき」だという。ユベルニクス革命は「機械論的思考様式」[をもった階級]が支配力を獲得する歴史過程の一環を形づくっている」のである。また、カントの悟性と感性の二元論に反対しつつ「五感が我々に供給する諸事実は」「自然のままにはなく」「近代的生产様式」により「前もって形成されている」。このように述べている。<sup>(31)</sup>

H・マルクーゼは一九六〇年代の半ばに、次のように述べていた。現代社会において「科学は……まず生存競争におけるひとつの用具であり、人間の自然に対する闘い、人間の人間に対する闘いにおける用具である」。現代において科学と技術は一体である。ところで、技術は「計算された方法科学的支配」であって、「支配の目的や利害が後になつてから、外から技術に提供されるのではない」。<sup>(32)</sup>

こうした議論の延長線上で、ハーバマスは近代経験科学は「技術的処理の可能性という先験的な視点を反映した方法論的関連体系の中で展開される」といい、その機械論的で数量化的な形式そのものが、技術の利用を可能にするからこそとられていることを明らかにしている。かくして、近代経験科学の認識は「先験的」意味で「技術的関心」に

よって指導されている。<sup>(33)</sup> こうした指摘は、ポパー流の科学観「科学は客観的知識であり、技術的应用は別問題。応用研究が外から科学に近づいて応用の仕方を開発してはじめて技術化される」というような見方とは全く対立する。こうして一九六〇年代にフランクフルト学派とポパー及びポパーを擁護するアルバートとの間に「社会科学における実証主義論争」とよばれる科学哲学の論争が行われた。

さてシュトゥレーカーはハーバマスのテーゼはまだ証明されていないとし、科学理論の正当化に用いられる基礎命題、つまり、観察文を支える「前科学的知識の領域における規則や規範を綿密に探究する」よう提案する。そして彼女はこの「前科学的領域」において、科学的認識に対して重要な役割を果すが、しかし「実践的技術的関心から全く免れている」ことを保証する二つの要因として感性的知覚と自然言語を指摘するのである。彼女によれば、知覚は「非歴史的で不変の身体組織に基づく」もので「なにが知覚されるかがそもそも或る関心によって説明されるわけにはいかない。知覚が言語的規範と関わっていることは認める。だが言語に対して「構成的関心を取りだすことは不可能」といわれる。こうして先にみた「科学の無関心」というテーゼが出てくるのである。<sup>(34)</sup>

このうち前者、知覚に関するシュトゥレーカーの主張は、すでにハンソンやホルクハイマーによって否定されている

し、自然言語についての彼女の主張も、マーチャントの論証によって反駁される。つまり、ルネサンスの主にパラケルスス主義的な有機論的エートスによって構成された言語と、それ以後の機械論的で技術的関心によって構成された言語とがあり、それらは自然を別様に把握したのである。<sup>36)</sup>

だが藤沢の議論はもっと視野の広い展望を与えるように思える。藤沢はプラトン以来の実践と観想との関連についての哲学的思索を踏まえながら次のように述べている。知覚は生物的生存本能に根ざすもので、知覚されるものに対してとるべき対処、行動がその基底に含まれている。知覚は実践的関心によって指導されているということだ。さて、人間の知覚の機構は有効な行動対処のために、「物」を中心として事象をとらえるように仕組みられているが、この把握を世界の基本的あり方として容認し精密化したのが古代原子論を承けた近代自然科学の世界観なのである。だが、人間が他の生物と区別されるべきであるなら、観想は人間の生物的な生存と行動の直接的な有効化に役だつ、視野のせまい実践的知覚から一步離れてより高次のよさを思惟するのでなければならぬが、近代科学の観想 *theoria* すなわち理論は逆に、知覚に歩みよりこの指示するところをオーソライズする観方なのである。高次の理論は観想は単なる便利や効率とは異なる本当のよさの実践つまり「よく生き

ること、よく為すこと」をめざす思惟である、このように説かれている。<sup>36)</sup>

(c) パットナムは論理実証主義も新科学哲学の相對主義もともに「科学主義」であり(後者は「人類学に鼓舞された科学主義」だという)、いずれも「理性の作用域に関して健全で人間的な描写を与えるという問題を回避する企て」だときめつける。そして相對主義の台頭の原因をあげながらつぎのように言う。「ファイヤーアーベントやフリーコは見解を極端に推し進める傾向が見られた。彼等の腹には何か政治的意図がある。つまり……共に現在の制度化された合理性の基準を資本主義や搾取、さらに性的抑圧と結びつけるのである」と。<sup>37)</sup>

加藤尚武はクーンのパラダイム論は「哲学的」とはとうてい言えない「素朴なアイデア」で「科学にも革命があるという発見に胸をときめかすことができた、ある屈折した心情の所産ですらあったように思える。フロイト風の言い方をすればそれは社会革命の代償なのだ」とこきおろしている。<sup>38)</sup>

クーンのパラダイム論は西側世界、つまり資本主義世界システムの中核諸国において、科学史や科学哲学だけでなく思想界全体に非常に大きな影響を与えた。このことは、「搾取や性的抑圧」を伴った資本主義システムがヨーロッパ

パの一角に生まれてから五〇〇年間、膨張し続けて今や地球上のすべての地域を周辺部として取り込み終え、もはやその行きづまりは明らかになっているにも拘らず「社会革命」による乗り越えの可能性が全く不透明であるという状況<sup>(39)</sup>に対する、そういう言い方をすれば、不満の「代償」を求める人が広範に存在するということを物語っている。

西欧近代科学はベーコンやデカルトが宣言しているように、はじめから自然の支配をめざす技術知であったが、機械論とニュートン主義の「自然哲学」つまり「科学」が直ちに技術的に応用されて生産力となったわけではない。しかし、実際に力たらしとするその目標はいわば直ちに実現され、資本主義の興隆をもたらしたのである。C・マーチャントや、B・イースリーの膨大な研究は近代科学と近代資本主義との間の次のような関係を明らかにしている。機械論とニュートンの自然哲学は、自然との共生、人間どうしの共存のための適切な社会の組織化ではなく、精神が不活性な物質を、人間が自然を、支配収奪するとともに地主や貴族が農民や平民を支配し、男が女を支配することがこの世界の普遍的で正しいあり方であると教えた。パラケルススの有機体論は母なる大地の子宮の中をさぐることである自然の開発を倫理的に抑制していたが、これを打ち倒した「科学」は自然の収奪を合理化し、こうして、いちはやく公害の被害を発生させつつ、森林や鉱山の大規模な開発

を可能にし、初期資本主義の興隆をもたらした。かくして、近代科学、機械論とニュートンの自然哲学『プリンキピア』、『光学』は、はじめから資本主義社会の興隆をひきおこした倫理でもあり、また、生産力（物質的、技術的條件）でもあったのである。<sup>(41)</sup>

そして、テクノロジーたる科学は現代においてもまた同様に二重の役割を果している。つまり、生産力としてまたイデオロギー（倫理的・精神的要因）として、資本主義システムの再生産を支えている。このことはすでにハーバマスやマルクーゼによって明らかにされている。

こうして、科学についての論理実証主義の見解に反対して相対主義的見解をとることは科学によって拡大再生産されてきた近代資本主義社会を合理的、つまり「客観的、普遍妥当的で真」なるものとする見解の誤りをはっきりさせることであり、資本主義システムがもたらし、再生産し続けている差別や抑圧の事実を明示的に指摘し、システムの非合理性を明らかにしようとすることに向かう。だからこの相対主義はバットナムの言う「文化人類学に鼓舞された科学主義」として「合理性はローカルな文化規範によって定義される」などと考えて、つまり、西洋近代Ⅱ資本主義社会もまた存続が認められるべき一つの合理的社会だなどと考えてすませることはせず、それを克服しようとする。むしろさきの藤沢の議論がそうであるように、「理性の作

用域に関して健全で人間的な描写を与えよう」と努力するのである。

視野のせまい理性に立つ人、科学技術の自然支配力の進歩のみを求め、社会システムの非合理性を無視し変革の必要がないと考える保守主義者が、上の努力を「不満」にもとづくものと嘲笑しうるのである。

### おわりに

倫理学者、大庭健はホーリズムの立場に立って、科学と資本主義システムの非合理性を明らかにし、その乗り越えをめぐす急先鋒の一人である。彼の研究はきわめて広範囲にわたる周到なものでありとても紹介できないしまた、ここで必要なことでもない。そこで、彼の、拡張されたホーリズムの考え方を中心に、方法論に限定して論ずる。なお、彼の議論は最先端の学問の用語を縦横無尽に、しかも厳密に用いてなされるが、それをそのまま引用しても理解がむずかしいので多少正確さには欠けるかもしれないが、わかりやすい語に言い換えて述べる。

彼が究極の目標としているのは、前に見た藤沢と同様に、「よく生きること、自然との共生、他の人間との共存、また、個としての実存において」であり、これを不可能にしている近代資本主義社会を乗り越えるべく彼は人々に働き

かけようとする。その際、近代を支えている「科学的理性」つまり、客観的な事実と一致する科学こそ真であって誰もがそれに従わざるを得ず、他方、倫理的判断などの価値判断は、科学と事実判断と峻別されるべきで、私的領域にとどまらねばならない、というみかたを大幅に変更する必要がある。なぜならばそのようなみかたが貫徹している限り、「よく生きる」ことを可能にする社会の実現に向けた提言は「科学的に真」と言えない、私的な発言として扱われ、正当な受けとめられ方をしないからであり、こうして社会は、結果について「無関心」または「無責任」に「客観的事実」を述べる学者の審議会と「責任を取る」がかけひきをとことする政治家達の手に委ねられてしまうことになるからである。

価値判断と事実判断の峻別がまちがっていることを、大庭は拡張されたホーリズムを用いて説得力あるやり方で示している。倫理的（価値的）判断も事実的判断も、ともに私達が予めもっている、善、正、美、……の語を述語とする諸領域の言明（判断）の全体からなるネットワークに照らしてみても、その真偽が判定されるのであり、倫理的判断「……べきである」という言明も、事実について「科学」が述べる言明と全く同じように真であったり偽であったりする。これが大庭の言うところである。

ところが、人々の「命題ネットワーク」の修正を期待し

つつ、このテーゼを中心とする倫理学的提言を実際に行おうとする少々奇妙なことが生ずる。彼は自分の倫理学的提言は彼のその他の言明全体と一緒に真偽を判定せよと言うが、彼の言明（著作）をいっぺんに調べるのできる人はあまりないだろうし、できたとしても、その人が自分の命題のネットワークを一挙に切りかえるということは考えられない。実際にはあのテーゼは大庭の諸言明を受けとる人が、たとえば大庭が大学の先生だということその都度の言明を信頼して受け取るということをやめさせ、自覚的、意識的にその人の命題のネットワークの全体に照して判断を行うようにしむけることになる（これは悪いことではない）が、そうするとその人はまさしく自分が有している「事実判断と価値判断は峻別すべし」、「科学の命題こそ客観的な真」等々のネットワークの中心部に位置する、それゆえ、修正されにくい判断に照らして、大庭の倫理学的提言を排除する、このような結果になるように思われる。基礎づけや原理論は、経験的な、現状の分析や、よりよき生の全体的提示やによって有効になるのではなからうか。

大庭の方法は学問的厳密さを重視することから生じると思われる<sup>43</sup>。では学問的厳密さの追求は何ゆえ行われるのか。彼がはっきり語っていることは「科学が学であり真であると主張しているのと同程度の真理性」ただし上で見たホーリズムの意味での真理性を自らの言明に与えるためである

ということだ。だが、彼は専門化された社会システムに乗った、単なるプロの倫理学者たらんとしていない。従って、彼が見出そうとしている真なる倫理学的な知は、ただ発見され、著作に発表され、せいぜいで倫理学者共同体によって承認されることを究極目標としているのではなく、それが人々の間に受け容れられることによって社会の変革の実現に結びつくことがめざされている。単純化して言うと、彼は専門分化した社会の知的影響力を行使しうる一部門にあって、社会の方向を決めるのに近いところにいる人々に、しかも（彼の主張の内容には大体賛成なのだが、私の不勉強を棚に上げて言わせてもらえば、そのあまりに厳密で難かしい論証の形式が、このような感じを抱かせるのだが）その「科学同様の真理性」によって、上から、人々を威圧しつつ承認を強いるというやり方で、その影響力を行使しようとしているということではなからうか。これは社会をつくりかえていくのに効率的なやり方のように見える。しかし、そうすることで彼は自ら克服すべきものとしている分業の固定化や効率性の追求という構造を支えることになるように思える。厳密な学問にもとづく「学者としての」倫理的提言は効率的のようで実は非効率なのではなからうか。人は専門家としてでなく市民としてふるまうこともでき、ルーマンの理論にも拘らず、すべてきまったチャンネルできまったやり方で活動が行われることが通常

となればなるほど、そうしたチャンネル外の、一定のまとまりをもった活動、行動は、人々の「命題ネットワーク」に有効に働きかけることができるのではなからうか（例えば、反原発の運動など）。現在、ソ連や東欧で進められているベレストロイカは、上からの社会主義の実現というやり方が効率的に行かなかつたことをふまえて、もう一度、下から再度、本当の社会主義が実現できないかどうか試してみろという、ゴルバチョフの壮大な「歴史の設計」の一環なのでなからうか。

私は実際に大庭が単に学者としてだけふるまっていると言うのでは全然ない。彼の理論の含意するところについて述べただけなのである。そしてやはり、非合理性と矛盾とをかかえた現在のシステムを乗り越える方向で、世の中の全体的なあり方を理論的にしっかりとらえて見せてくれる人が必要だということも明らかなことである。

## 注

(1) P・チュイリエ／小出昭一郎監訳『反科学史』（新評論、一九八四）参照。なお、以下でふれている科学・技術の社会（経済、軍事、政治）との関係における諸問題について、より詳しく考えるためには、M・ギボンズ、P・ガメット／里深文彦監訳『科学・技術・社会を見る眼』（現代書館、一九八七）、B・バーンズ／川出由己訳『社会現象としての科学

——科学の意味を考えるために』（吉岡書店、一九八九）を参照せよ。核兵器との関係を中心に論じたものに川本隆史「科学と倫理のあいだ——科学者の社会的責任」をめぐって」「理想」一九八七年九月号がある。

(2) 川本隆史「現代生物学とバイオポリティクス——『社会生物学論争』をめぐって」塚崎、加茂編『生命倫理の現在』（世界思想社、一九八九）、「生命の科学と神話——ウィルソンの『社会生物学』のゆらぎ」「理想」一九八五年二月号。

(3) 公害における科学者の相反する役割について、原田正純『水俣、もう一つのカルテ』（新曜社、一九八九）、池田貞雄他『統計科学序説Ⅰ・社会の中の統計学』（内田老鶴圃新社、一九七七）、古典ともいべきものとして宇井純『公害の政治学』（三省堂、一九六八）、やや専門的なものとして塚谷恒雄「大気汚染疫学の論理と最近の動向」『公害研究』Vol. 16, No. 6（岩波書店、一九八七年一月）。科学における多くの欺瞞の例とガレロオやニュートンなどでさえデータの操作を行ったことについてW・ブロード、N・ウェード／牧野賢治訳『背信の科学者たち』（化学同人社、一九八八）。

(4) 「純粹科学」を「技術的応用」と区別することは現代において全くできないということは常識だと思われるが、念のため参考文献をあげると、ハーバマス／長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』（紀伊国屋、一九七〇）、坂本賢三「技術の発生と展開」『技術・魔術・科学』（新岩波講座哲学第八巻・一九八六）、吉岡斉『科学革命の政治学——科学から見た現代史』（中公新書、一九八七）。なお、「応用研究」

として扱えられず、しかも、社会的・軍事的・経済的目的などの「外的な目的を理論発展の手引にする」最近の科学の動向について、G・ペーメ他／丸山徳次訳「科学の目的内在化」『現代思想』一九八五年七月号参照。

(5) 「科学論」は哲学史とくに認識論史の延長上でとらえるべき面があるが、この試論ではふれていない。現代科学論を哲学史、認識論史の全体、さらには人類史の全体との関係において明快に位置づけ、その意義と課題を説いた、広松渉「科学論の今日的課題と構案——近代知の構制の対自化と超克のために」『思想』一九八三年十月号参照。

(6) 市井三郎『哲学的分析』(岩波書店、一九六九) 第三部。なお、カルナップらの「拙さ」については大庭健「科学的客観性と経験的・人間的 SLACK」『現代思想』一九八八年七月号。

(7) R・K・マートン／森東吾他訳『社会理論と社会構造』(みすず書房、一九六二) 第四部。

(8) 科学に対するクーンの懐疑的姿勢について中山茂『パラダイム再考』(ミネルバ書房、一九八四) 参照。クーンの「科学革命の構造」が出版された一九六二年に、R・カーソンの公害を告発する書 *Silent Spring* が出版された。六〇年代後半米国のベトナム反戦(枯葉剤の使用!) 運動と大学闘争の中で、環境保護運動と科学批判とが結びつきつつ高まったといわれる。中山茂「科学と社会の現代史」(岩波現代選書、一九八一) 参照。

同時期の日本の全国大学闘争の中では、理工系学部での大

企業からの委託研究、公害企業への加担、医学部での患者への人体実験など、大学の研究(者)のあり方が問われた。高度成長期の科学技術は海や河川、大気汚染などの深刻な公害をひきおこし、反公害運動が高まった。中国の文化大革命における反専門(家)主義(「土法」、「自力更生」など)も影響を及ぼした。七〇年代末の東大では企業から百億もの募金を集め、「基礎研究」を行うというインセンチキが批判された。

(9) 吉田夏彦「相対主義的実在論は可能か(村上陽一郎との対談)」『現代思想』一九八五年七月号。

(10) 山元一郎訳『論理哲学論』世界の名著58巻(中央公論社、一九七二)。末木剛博『ヴィトゲンシュタインの論理哲学論考の研究』I・II(公論社、一九七六)も参照。

(11) A・J・エイヤー／吉田夏彦訳『言語・真理・論理』(岩波書店、一九五五)、カルナップ「言語の論理的分析による形而上学の克服」永井、内田編『カルナップ哲学論集』(紀伊国屋、一九七七)。

(12) カルナップ「テスト可能性と意味」前掲書、ヘンベル／黒崎宏訳『自然科学の哲学』(培風館、一九六七)。カルナップの帰納的確率の考え方は、シュテークミューラー／田村慶一訳「カルナップ・帰納的確率」シュベック編『大哲学者の根本問題・現代I』(富士書店、一九八二)、N・グッドマン／両宮民雄訳『事実・虚構・予言』(勁草書房、一九八七)の「訳者解説」などからもわかる。

(13) 村上陽一郎「事実・法則・理論」『世界と知識』講座哲学・2(東大出版会、一九七三)、「科学と非科学」『技術・魔術・

科学』(前出)など。

- (14) ヘンベル前掲書、及び長坂訳『科学的説明の諸問題』(岩波書店、一九七三)。

- (15) ボアンカレー/河津伊三郎訳『科学と仮説』岩波文庫、一九五七) 第三篇。

- (16) ポパー/大内、森訳『科学的発見の論理』(恒星社厚生閣、一九七二)、久野・市井訳『歴史主義の貧困』(中央公論社、一九六一)。

ポパーは科学と非科学の「境界基準」は、第一に知的探究、そして論理的厳密さ、及び、「実際的な応用可能性」を重視する「価値判断や好み」にもとづくものだと言ひ、科学が技術と全く無関係とは言っていない。

- (17) 彼は科学的真理はプラトンの的なアイデアの世界に属する、純粹に客観的なものだという。だが、研究プログラムが「前進的」か否かは、つまり、ある理論が科学的に真として妥当するかどうかは、ラカトシュによって「後から」「合理的に再構成」された時にわかるのである。彼が描いた科学理論の発明・発見の歴史物語は、ヘーゲルの歴史哲学における「絶対精神」を矮小化した「科学主義的精神」の「自己実現」の過程とでもいうべきものである。しかし、クーンはこれを「過去の歪曲」ときびしく批判するであろう。クーン「私の批判者達に関する考察」(注(22))におけるポパーについてのラカトシュの説明への批判参照。

- (18) イムレ・ラカトシュ/村上陽一郎他訳『方法の擁護』(新曜社、一九八七)。

- (19) W・V・O・クワイン「経験主義の二つのドグマ」中山・

持丸訳『論理学的観点から』(岩波書店、一九七二)。クワインが「科学主義的」側面ももっている事については前掲大庭論文を参照。

- (20) 大出・宮館訳『ことばと対象』(勁草書房、一九八四)。

- (21) ポパーの見方とは逆に科学の「成熟」と「進歩」を特徴づけるのは「批判的談論の放棄」だといわれている。

- (22) 中山茂訳『科学革命の構造』(みすず書房、一九七二)、「発見の論理か研究の心理学か」、「私の批判者たちに関する考察」ラカトシュ・マズグレイヴ編/森博監訳『批判と知識の成長』(木鐸社、一九八五)、常石敬一訳「コペルニクス革命」(講談社学術文庫、一九八九)、佐々木力訳「歴史所産としての科学的知識」『思想』一九八六年八月号。なお、B・バインズ/野家訳「トーマス・クーン」加藤尚武他訳『グラントセオリーの復権』(産業図書、一九八八)はクーンの「保守性」も明らかにした好解説。

- (23) 村上・渡辺訳『方法への挑戦』(新曜社、一九八一)、「専門バカへの慰め」前掲『批判と知識の成長』。

- (24) 「通常科学と革命的科学の区別は妥当であるか」前掲『批判と知識の成長』。なお彼は一九五三年刊『科学哲学』(藤川訳、東京図書、一九七二)で、クーンに先立ち科学的知識について(穏かな)相対主義的見解を述べている。

- (25) 最近では例えば、H・パトナム/藤川吉美訳「二つの合理性概念」『現代思想』一九八五年七月号。

- (26) B・バインズ、D・ブルーム/高田紀代志訳「相対主義・

合理主義・知識社会学』『現代思想』一九八五年七月号。

(27)

この点は真理の対応説にともなう従来のアポリアを解決するものとしてはよいと思う。しかし、相対主義的な「二元論」では、はじめから、経験や知識に対応するべき唯一、絶対の「実在」を主張しない。むしろ、D・ボーム(井上忠訳『全体性と内蔵秩序』青土社、一九八六)のように、無限な多様性を内蔵する実在は、それぞれのみかたや接近のしかたに応じて——単に言語によるのでなく——異なるパターンをとってあらわれると考えることもできる。私はこの考え方でどのようににまづいのかまだわからない。

デイヴィッドソンは、理論の通約不可能性とは、結局のところ、文の真理はその文が属する言語に相対的ということにつきると考えているが、こうした見方では、例えば、科学史における光の波動説と粒子説の対立の発生あるいはすべての物質の波と粒子の二重の性質は理解できないのではなからうか。彼は異なる理論または言語(の体系)間で、真である信念の一致を最大にすべく翻訳を行った時に不一致が残るとすれば「われわれの常識的科学的知識に従って」説明されるべき「誤謬」だとみなす。ここが問題である。だが、クワインの翻訳に関する不確定性テーゼに従えば、そのような結論をだすことはできないであろう。

D・デイヴィッドソン／土屋俊訳「経験主義の第三のドグマ」『現代思想』一九八五・七、丹治信春訳「真理と知識の斉合説」同一九八五・六 参照。

(28)

野家啓一「知のネットワークとパラダイム」『現代思想』

一九八五・七「テクストとしての自然——科学の「解釈学」のために」『思想』一九八三・一〇。

野家は「パラダイム」を科学理論をなりたたせる概念的枠組と限定的に解釈して「通約不可能性」を認める。他方、生活実践の様式と結びつき言語の影響下にもある「経験のアプローチ」——経験をなりたたせる枠組は、民族や共同体の歴史に応じてある程度の違いはあっても「基本的な生活実践(食べる、眠る、……狩猟する、耕す……等々)」において、……「決定的な差異」がないからと「通約不可能性」を否定する。経験をなりたたせる枠組みは言語以外のものからもなりたっているという指摘は重要で、それだけに生活(生産)様式のちがいは世界把握のしかたに大きな違いを生む、従って、長期的には理解ができないような点も生じ得ると言えないか。クインのパラダイムは両方を含んでいると私は考える(例えば「歴史所産としての科学的知識」における、アリストテレスの「運動」という語についての議論)。「通約不可能」とは、むしろ、「理解しよう」と努力すべき」と同義語だと考えるとよくわかる。

(29)

N・R・ハンソン／村上陽一郎訳『科学的発見のパターン』講談社学術文庫、一九八六。

(30)

加藤尚武『パラダイム相対主義』批判』『現代思想』一九八五・七。

(31)

M・ホルクハイマー「伝統的理論と批判的理論」久野収訳『哲学の社会的機能』晶文社、一九七四。

(32)

マルクーゼ「マックス・ウェーバーの著作における産業化

と資本主義」。「文化の新しい定義のための覚え書き」田窪清

秀他訳『文化と社会』せりか書房、一九七二。

(33) 前掲『イデオロギーとしての技術と科学』。

(34) E・シュトレイカー／常俊宗三郎訳『科学哲学の根本問題』(晃洋書房、一九七三) I部四章。

(35) C・マーチャント／団まりな他訳『自然の死——科学革命と女・エロロジ』(工作舎、一九八五) 第一章。

(36) 藤沢次夫「実践と観想」新・岩波講座哲学・第一〇巻、「反省と考察」同第一六巻、「哲学の哲理性」岩波講座哲学第一巻(一九七〇)。

(37) H・パットナム／吉川吉美抄訳「二つの合理性概念」『現代思想』一九八五・七。

(38) 加藤前掲論文。

(39) 岩田弘『現代社会主義と世界資本主義』批評社、一九八九。  
I・ウォーラステイン／川北稔訳『史的システムとしての資本主義』岩波現代選書、一九八五。なお私の「移行期としての現代と科学技術」跡見学園女子大学文化学会『フォーラム』第六号、一九八八年も参照。

(40) 伊東俊太郎「科学の社会的次元」新岩波講座哲学第八巻、山本信「諸問題の系譜」及び、岩田靖夫、加藤尚武との《討論》、山本信編『哲学の基本概念』講座哲学第一巻(東大出版会、一九七三)。

(41) B・イーブリー／市場泰男訳『魔女狩り対新哲学——自然と女性像の転換をめぐる』(平凡社、一九八六)、C・マーチャント前掲書。拙稿「デカルト論——その自然学と倫理

学』『フォーラム』第七号、一九八九も参照。

(42) 大庭健「現代において倫理学とは何であり得るか」日本倫理学会編『倫理学とは何か』(慶応通信、一九八八)「近代的

合理性と《実質的》合理性」『思想』(一九八七・五)「倫理学的に真」とは何か」『創文』(一九八六・七)「指示・事実・真偽——科学と倫理学の「存在論的差異」について」『理想』六一四、六一五(一九八四)、「客観的社会科学と行為論——社会科学は「科学であるべきか」『思想』(一九八三・一〇)。

(43) 私自身は学問の方法論を論ずることはできない。「科学と生活の間」に位置する倫理学」を説く川本の方法論に近さを見出す。川本隆史「生活・倫理・科学——「反照的均衡」のすずめ」前出『倫理学とは何か』参照。上でも一部参考にした。

熊野は大庭の「科学と込み」の戦略は、現に妥当している『支配的思想』支配階級の思想」の大枠を超出できないと、むしろ、私とは反対の方向から批判している(熊野純彦「倫理学的プラグマティズムとその帰結——大庭プログラムに寄せて」『創文』一九八六・八)。私は理論の大なたをふるうよりも、現実を少しでも直接に変えることの方を好む。また「命題ネットワークの調整」をめざす大庭が「言語ゲーム」モデルにとらわれているとも熊野は批判し、変革の実践の妨げとなっている「言語ゲーム」モデルをまず超克しようような言語哲学をめざす(「言語・身体・構造——「言語ゲーム」論批判のために」『エビステマー』朝日出版、一九八五・七、「言語と他者」『現代思想』一九八九・三)。ささやかながら実践に近い私から見ると、大庭の倫理学は変革への妨げ

となつてゐる価値と事実の峻別という考え方などの克服といふ具体的な課題を達成しようとしてゐるが、熊野では、既成のパラダイムの社会理論の全体をひっくり返せるような一般的な言語理論という遠大な計画がめざされて、ますます、実践から遠のく。

(すどう じゆうじ・西洋思想史)



エッシャー「相対性理論」